



👁️👁️ みどころ

アイドル歌手への登竜門となるTV番組は、米国、日本はもちろん、『歌声にのった少年』(15年)を見ればエジプトにもあったが、さて、インドでは？

厳格なイスラム教徒の家庭では、今でも男尊女卑が顕著。本作では、父親の横暴VS母娘の忍従の姿に注目だが、そんな中、歌姫を目指す少女は「シークレット・スーパースター」と名乗り、ブルカ姿で、YouTube デビュー！それが大ヒットし、落ち目のプロデューサーから声がかかる中、少女はレコードデビューのみならず、母親の離婚まで援助したが、さあ、母親の意思は？

夢を追う力、困難を乗り越える力は、こんな映画でこそ発揮！それをわかっていながらも、次々とスクリーン上に登場する感動シーンの連続に思わず私は涙、涙また涙！！これは、必ずしも年のせいだけではないはずだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■アイドル歌手への登竜門は？いや、これはプロの世界！■□■

日本には、かつて五木ひろし、八代亜紀等の大スターを生み出した「全日本歌謡選手権」や桜田淳子、山口百恵、森昌子等の超アイドルを生み出した『スター誕生！』というTV番組があった。私は、『歌声にのった少年』(15年) (『シネマ 39』268頁) を観てはじめて、『オマールの壁』(13年) (『シネマ 38』110頁) のような大変な状況にあるイスラエルにも、全米の人気オーディション番組『アメリカン・アイドル』のエジプト版である『アラブ・アイドル』なる番組があることを知った。同作は、そんな番組にパレスチナ・ガザ地区からただ一人出場し、見事「アラブ・アイドル」の地位に輝いた少年の「サクセスストーリー」だった。

本作冒頭、15歳の少女インシア（ザイラー・ワシーム）が、母親のナズマ（メヘル・ヴィジュ）と共にインド最大の音楽賞に誰が選ばれるのかを固唾をもって見守りながら賭けをするシーンが登場する。インシアの予想が当たったから、賭けではインシアが勝ったにもかかわらず、「負けたら何でも望むことを叶えてあげる」と約束した母親は、インシアの「望み」を「それだけはダメ」とはねつけたから、アレレ……。そりゃそうだろう、インシアの望みは、インド最大の音楽祭で大好きなギターを弾いて歌を歌うことだったのだから。

しかし、そんな夢は追うだけムダ。それがナズマの見解だし、厳格な父親ファルーク（ラージ・アルジュン）は娘が勉強に専念することを要求し、ギターで歌うことすら禁止していたから、インシアの夢は実現不可能な夢だ。もっとも、インドにアメリカの『アメリカン・アイドル』や日本の『スター誕生!』、エジプトの『アラブ・アイドル』のような番組があればいいのだが、冒頭に見るTV番組はプロの世界。したがって、これはド素人の少女インシアにはあまりに遠く、かけ離れた世界だろう。

■□■TV番組への出演がダメなら、YouTubeがあるさ! ■□■

『スター誕生!』のようなTV番組がないうえ、「音楽祭」はプロだけの世界でド素人の参加がダメなら、YouTubeがあるさ!それが今ドキの若い女の子の感覚だ。もっとも、インシアは今、インド西部のグジャラート州（別名バローダー）で、両親と大おぼ（ファルーク・ジャフア）、弟グッドゥ（カビール・サジット）と暮らしていたが、厳格なムスリム家庭では父親（夫）の権威が絶対で、女性蔑視がトコトンすごいらしい。それは、仲間との楽しい修学旅行から帰ってきたインシアを車で迎えに来たナズマのサングラス姿を見れば明らかだ。サングラスで隠していた左目の下のキズは転んだため。ナズマはそう弁解していたが、これは日常茶飯事のように繰り返されているファルークの暴力のせいであることは明らかだ。修学旅行でインシアは、自慢のギターと歌の腕前をクラスメイトに披露したが、家に戻れば自由に歌うことは厳禁。もし、そんな姿が父親に見つかれば……?

何よりも欲しがっていたパソコンを母親からプレゼントしてもらったインシアは、自分の夢に向けたスタートとしてYouTubeで自分の歌声を聴かせることを思いついたが、もし、それを父親がパソコンで見たら、たちまちアウト。そんなジレンマの中、ナズマが思いついたアイデアは、ブルカスタイルで顔を覆い隠して歌うこと。これなら顔がわからず、歌声だけで勝負できるから、インシアにはピッタリだ。なるほど、なるほど。

しかして、ある日、インシアがオリジナル曲をギターを弾きながらYouTubeで流し、自らをシークレット・スパスターと名乗ると、その反響はものすごいものに。こりゃ大成功!

■□■イスラム教に基づく女性差別とは?その現実とは? ■□■

アメリカはレディーファーストの国だが、日本は亭主関白の国。戦前まではそうだったが、戦後の日本は大変身し、若い男性の女性化、軟弱化が問題になっている。

それはともかく、インドではイスラム教を信仰している人も多く、インシアの両親もそうだ。ちなみに、インシア役を演じたザイラー・ワシームも敬虔なイスラム教徒で、女優の仕事が増えてくるとイスラム教徒としての信仰に従うことができなくなるとして、2019年6月30日、SNSで突然俳優引退を発表したそうだ。

イスラム教の経典『コーラン』と『ハディース』では、女性は男性より劣位にあり、保護されるべき存在であるとされているため、弱い女性を保護するという名目で一夫多妻制ができ、また、女性は男性を誘惑するものとされたため、その害悪を予防するためにヴェールやブルカに代表される種々の男女隔離の習慣ができています。したがって、イスラム教では「コーランの教え」に従って、一夫多妻制の承認(？)、家庭内暴力の承認(？)、女性からの離婚請求の禁止(？)等の女性差別が今なお存在し、男尊女卑、亭主関白の時代が続いているらしい。しかして、敬虔なイスラム教徒であるインシアの家庭でのその現実は何？

■□■父親の横暴VS母娘の忍従の姿にビックリ！■□■

もちろん、イスラム教に基づく女性差別にはさまざまな宗教的な教えが絡んでいるから問題は単純ではないが、本作に見る夫ファルークVS妻ナズマの関係、父親ファルークVS娘インシアの関係は、日本では到底考えられないほど、横暴VS忍従の関係にある。冒頭での、娘を迎えに来た時の母親の顔にどうしてキズがついたのかはわからないが、夫に内緒でネックレスを売り、そのお金で娘にパソコンを買ってやっていたことがバレると、その後は軍隊式の“鉄拳制裁”が待っていたから、こりゃひどい。これによって、前回のギターを切られてしまった罰に続いて、パソコンを投げ捨てて壊してしまうことを強いられたから、インシアもかわいそうだ。

もっとも、ファルークはサラリーマンとして昼間は外に出て働いているから、その間この母娘は好きなことができていた。しかし、近々ファルークはサウジアラビアに転勤(栄転)するらしい。もしそうなれば、父親が単身赴任することになるから、私たち母娘は今よりもっと自由になれる。インシアはそう解釈し期待していたが、いよいよ転勤が決まってみると、何とファルークの言うところでは家族全員が揃ってサウジアラビアに移住するらしい。そのうえ、インシアの婿選びまで計画されているそうだから、インシアはビックリ！

そんなの絶対イヤ！インシアがそう叫んだのは当然だ。そして、コトここに至って、インシアはナズマに対して「断固離婚すべし」「それがナズマのためでもあり、母娘のためでもある」と、15歳の少女にしてはすごい説得力で母親を説き伏せていったが、さて、ナズマの返事は・・・？本作全編にわたって繰り返し展開される、これぞ父親の横暴VS母

娘の忍従の姿にはビックリだが、そこで見せる母娘の連携と心の交流に私は何度も涙が・・・。

■□■インドの国宝アーミル・カーンが意外な役でいい味を！■□■

“インドの国宝”と称されている俳優アーミル・カーンは、『ダンガル きっと、つよくなる』(16年)で、自分の果たせなかったレスリングの世界大会での金メダルの夢を自分の娘たちに託する父親役を熱演し、いい味を出していた(『シネマ42』215頁)。同作終盤では、娘が父親の指導から離れ、いかに独り立ちしていくか、また、その中で父娘の絆がいかに変容していくかがポイントになっていたが、ラストでの意外な父娘の物語に私は大粒の涙が止まらなかった。

本作では中盤以降にアーミル・カーンが登場するが、彼が演じるのは、有名だったが今は落ち目になっている音楽プロデューサーのシャクティ・クマール役。有名人は何でも本音で語るのはご法度。周囲に目を配り、あちこちにゴマをすりながらバランスよく世渡りするのが大切だ。したがって、インドの『スター誕生!』のような番組で、アイドル志望の出場者をボロクソに罵倒しているシャクティの姿を見ると、いかに有名でもすでに過去の人。そう思わざるを得ない。もっとも、シャクティの音楽的才能は半端ではないから、今の流行に合わせるにはどんな修正が必要かはよくわかっているらしい。そのため、今や中年おじさんになっているシャクティが選択している音楽とは？

他方、シャクティにとっては自由な生き方こそ最高。したがって、それは職業としている音楽のみならず、女性関係でもそうらしい。そのため、結婚と離婚を繰り返してきたが、直近のニュースでインシアも良く知っているのは、辣腕の女性弁護士がついた妻との離婚訴訟でシャクティが負けたこと。これによって、離婚裁判の連勝記録を更新した女性弁護士は有名になっていたから、インシアは母親のリコンの際は是非この弁護士に委任したいと考えていたが、今の時点ではそれは所詮高嶺の花・・・。しかし、インシアのYouTubeを見たシャクティからメッセージが入り、「スタジオに来ないか?」「歌手デビューすれば一躍有名になれる」と誘われると・・・。

■□■このクラスメイトの協力さえあれば！スタジオでは？■□■

日本はもとより、韓国や中国と同じようにタイも今や学歴社会だから、奨学金付きの海外留学が若者たちの夢になっているらしい。そんな現実を踏まえて作られた「高校生版『オーシャンズ11』」とも言うべき、第一級クライム・エンタテインメントのタイ映画が『パッド・ジーニャス 危険な天才たち』(17年)だった(『シネマ43』205頁)。ここでは、カネのためにカンニングに協力する天才少女に対して批判的だったもう一人の天才少年が、大学統一入試「STIC」で、「時差を使った世紀のカンニング」を使って共同作戦を展開するクライマックスが見モノだった。それに対して本作は、インシアが学校や父親にはもちろん、母親にも内緒でシャクティのスタジオに飛行機で向かうについて、インシアに好

意を持つクラスメイトのチンタン（ティルトウ・シャルマ）が登場するので、その協力ぶりに注目！

はじめてシャクティのスタジオに案内されたインシアは緊張気味。そんなインシアに手渡されたシャクティの新曲は、かつて青江美奈が歌って大ヒットした「アッハ、ウフン」という女の溜息から始まるセクシーな曲。これが今ドキの流行！とシャクティがヒット戦略に徹して書いた自信作だが、インシアはその曲をうまく歌いこなすことができなかったから、アレレ……。ここはプロのスタジオ！単に歌がうまいだけではやっぱりダメだった！とシャクティが失望したのは当然だ。しかし、プロデューサーたちが落胆し、レコーディングを諦めかけていた時、シャクティが数年前に歌っていたバラード曲を歌いたいと申し出たためそれを歌わせてみると、こりゃグッド！これなら大ヒット間違いなしだ。

そんなシャクティのお墨付きを得たインシアは喜び勇んで学校に戻り、チンタンとともに「戦果」を確認。いよいよインシアの歌手としての未来がハッキリ見えてくることに……。

■□■あの弁護士の手で母親の離婚も！そんな戦略だったが。■□■

インシアの歌の才能と、シャクティのプロデュースの才能がうまくミックスした結果、レコーディングは大成功。しかし、インシアが歌手としてデビューするためには、さらに乗り越えなければならぬ大きな壁があった。それは、歌手デビューなど絶対に認めない父親とどう「対決」するかということだ。前述したように、ムスリムの世界では妻からの離婚請求は容易に認められないが、シャクティの離婚訴訟を妻側の勝利に導いたあの女性弁護士に依頼すればナズマも離婚できるのでは？そう考えたインシアは、シャクティへの追加のお願いとして、かつて敵対したあの女性弁護士を紹介してくれるよう頼み、弁護士に事情を説明すると快く応じてくれたから、インシアは万々歳。そのため、インシアの飛行機旅行はレコーディングの1度では済まず2回になったが、その飛行機旅行（出張）は両方ともチンタンの協力を得て秘密裏に運ぶことができた。すると、後は事の次第をナズマに報告し、弁護士から預かった委任状等の書類にナズマのサインをもらうだけだ。しかし、ある日、インシアはこの間のすべての事情をナズマに打ち明け、サインをもらう書類を渡したが……。

そこで、インシアにとっても私にとっても意外だったのは、ナズマはあくまでイスラム教を信じる家庭の中で最大限許される自由をインシアに与えてきたのだと説明したこと。つまり、ナズマはいくら夫から暴力を受けても離婚する意思はない。夫のサウジアラビアへの転勤が決まっている以上、家族そろって引っ越すのは当然と考えていたわけだ。そのため、学校にも自分にも内緒で飛行機に乗って、シャクティのスタジオで歌手としてデビューするためのレコーディングをしたと聞いても、ナズマは全く喜ばなかった。まして、娘が母親の離婚の世話までしたと聞くと、ナズマの怒りは頂点に！

こんなはずではなかった！インシアの思いはそうだったが、ナズマが離婚の意思を示さ

ず、家族そろってサウジアラビアへの移住を決め、インシアの歌手デビューを認めない以上、インシアはすべてを諦めるしかなかった。しかして、今日は引っ越しの日。家族そろって空港に入り手荷物検査を終えたが、持ち込む荷物が多すぎると言われたファルークは、インシアのギターを捨ててしまえと命令。インシアにとっては大切なギターでも、ファルークにとってそれはただのガラクタに過ぎないわけだ。そんな風景を目の当たりにしたナズマはそこで遂に堪忍袋の緒を切り、ファルークに対して、「私はサウジアラビアに行きません、あなた1人で行って下さい」と啖呵を切ることに。これにはファルークもビックリし、あれこれと御託を並べたが、ナズマの決意は断固としたものだったから、さあ、その後の事態は・・・？

■□ 『ダンガル』も良かったが、本作も涙、涙また涙！ ■□

私は今年1月に70歳になったが、そこで思うのは、やけに涙もろくなったこと。意外な展開、意外なシークエンスに出会ったことで感動し涙を流すことは昔からよくあったが、年を取ると、予定通りの進行であっても、スクリーン上でその感動的なシーンが続いていくと思わず涙を流すことが多くなった。そのため、本作前半では、ファルークから受ける横暴の前に我慢して耐えるインシアとナズマの姿に涙していたが、後半からはシャクティの意外な協力でインシアの努力があれこれと実を結ぶたびに涙を。そして、空港でナズマがファルークに対して啖呵を切るところで、私の涙は頂点に。本作のパンフレットには、「落ち目のプロデューサーと、ワケあり YouTuber 少女。人生逆転をかけてタッグを組む!？」 「夢を追う気持ちは、誰にも止められない」「ゴールデンメンバーが結集、メディア・観客の心を揺さぶる絶賛の嵐!」の文章が躍っているが、まさにその通りだ。

歌の上手な少年が、『スター誕生!』に出場して歌手になる夢を果たすサクセスストーリーが、前述した『歌声にのった少年』だったが、本作はそれと同じサクセスストーリーの中に、ムスリム特有の男尊女卑の問題点と、少女の自立を加えたところが面白い。また、シャクティという何とも面白いキャラクターが加わったことで、ストーリーに厚みが加わっている。ハリウッド版の『スター誕生!』として大ヒットした映画が、レディー・ガガ自身が主演した自伝ともいうべき『アリー スター誕生』(18年) (『シネマ43』40頁) だった。同作でも、歌手とプロデューサーとの関係(蜜月ぶり)が大きなテーマだったが、本作に見るヒロインの少女と大きく歳の離れた落ち目のプロデューサーとの関係も非常に興味深い。もっとも、それらのすべての人間関係は、あつと驚く意外なものではなく、すべて想定内のものだが、なぜか本作では、それらすべてが私の涙を誘ってくれた。

さだまさしが作詞作曲し、山口百恵が歌ったヒット曲『秋桜(コスモス)』では、「涙脆くなった母が庭先でひとつ咳をする」シーンが歌詞にされていたが、本作で私が再三涙したのは、必ずしも私が年を取ったせいばかりではないはずだ。

2019(令和元)年8月26日記